

寝太郎伝説の深層構造

The Deep Structure of “NETAROU LEGENDS”

井上 孝夫

INOUE, TAKAO

要旨 山口県山陽小野田市厚狭に伝わる「三年寝太郎」伝説の深層には何があるのか。文献や寺社由来などを溯ってその始原の姿を検討していくと、そこからみえてきたものは、「寝る」こととは全く無関係な、妙見（北極星）信仰とのかかわりであった。寝太郎とはすなわち、子（ね）太郎であって、子の星（妙見）を意味する。そして妙見信仰はタタラと結びつく。寝太郎とは、妙見を信仰する製鉄民だったのである。

キーワード：製鉄の民俗（Folklore of Iron Manufacture）、妙見信仰（Faith to the Myouken）、百済系渡来人（Visit People from Kudara）

第1節 はじめに

山口県厚狭地方（現・山口県山陽小野田市厚狭）に「三年寝太郎」と呼ばれる伝説が語り伝えられている。3年ほどのあいだ寝てばかりいて、村人からは疎んじられていた若者が、一念発起して用水路を築き、水田を水で潤し、農業生産力を上昇させ、村人から感謝されるようになった、といった趣旨の話である。似たような伝説はほかの地域にもあり、また室町時代に成立した『御伽草子集』のなかに収められている「ものくさ太郎」の話の影響も考えられる¹。しかし「寝太郎」といえば、今日では、この厚狭の「三年寝太郎」の伝説が最も有名である。

わたしは、寝太郎伝説の背景には製鉄民の姿があるにちがいないと考えてきた。それは、砂鉄につうじる「厚狭」（アサ）という地名への着目と、昼間寝ている怠け者という視点は農民の立場からみたものであって、人知れず夜間の作業に従事する寝太郎こと製鉄民を異質な存在とみなしているにすぎない、と考えていたからである。

しかしそのような直感は、ただちに妥当性をもつものではなかった。寝太郎伝説と製鉄とを結びつける第三項として、妙見（北極星）信仰がこの地域に色濃く残っていることこそ、重要なポイントだったのである。

寝太郎伝説に関する従来の研究では、この点についてほとんど完全に見落とされている。そこで本稿では、これまで視界から遠ざかっていたこの第三項の存在に留意しつつ、寝太郎伝説の原型へと溯って、そこに込められた始原の構造と意味を解明していくことにしたい。

第2節 『風土注進案』における寝太郎伝説

『山陽町史』に収められた江澤能求の論稿「寝太郎物語」（江澤，1984）は、寝太郎伝説の原型とその後の脚色について鮮やかに分析してみせてくれている。そこでまず、この江澤（1984）の先行研究に依拠して、寝太郎伝説の形成過程について簡単に触れておくことにしよう。

寝太郎伝説の根拠としてよく取り上げられるのは、『風土注進案』「末益村」の項の記述である。そこには、次のようにある。

「山川の野田といへる所には、今に牡蛎の附たる石遣れり、然るに年を経ていつとなく埋り、後世に当つてハ中々汝の通へる事もなく広々たる空地となりけるを、中古大内家、四箇国の武将たりし時に当つて、賤の男に一人の異翁あり、世渡りの生業を事とせず、常に寝るを要とし、万づの工夫する事天晴〔性〕の生〔性〕質たり、爰におゐて世人その情〔姓〕名をいはず、寝太郎寝太郎と呼びしと也、終に灌田の工夫をこらし、これに厚狭川の流れを引くものならば多くの田園となり、行末此の里の繁栄ともなるべしと、寝食を忘る、事数十日終に川上沓村といへる所に、大なる堰りを工夫し、これを県に訴へ、蒼生いさをしと悦び、終には千町が原を開き田園となし、末益村と呼ぶ、是はこれ行末益々繁栄なりといふを説して名とせりと云々、此の地寄る所なし、里民彼の寝太郎が遺積〔績〕を悦びその墳墓にて少〔小〕き祠を建て寝太郎権現と呼び、今に怠らず歳時に是を祭ると也、その祠千町が原の中英〔央〕にあり、世人能知る所ニ而御座候」(〔 〕内は引用者による)。

この記述は天保13年(1842年)のものであるが、文中にある寝太郎権現とされる小さな祠は円応寺荒神堂跡の石祠のことで、寝太郎塚と呼ばれて現存している。また、寝太郎塚としての文献的な初出は、宝暦・明和の頃(1751-1772年)に画かれた有馬喜三太の『御国廻行程記』で、そこに「禰太郎塚」とある、という。

もう一つ、この円応寺所蔵の高さ23センチメートルほどの稲荷の木像が「寝太郎稲荷大明神」といわれることもある。しかしこの稲荷の木像は五穀豊穡を願って信仰されていたものらしく、「寝太郎稲荷」という名称が使われ始めたのは寝太郎伝説が流布してからのことであると考えられる。

これらの点を踏まえていうと、今日的な検証に耐え得る寝太郎伝説の起源は、文献のうえでは18世紀半ばを溯るものではない、ということになる。

第3節 現代寝太郎伝説の形成

ところが、文献に書き記されると伝説は固定化し、そのうえに様々な脚色が加えられたり、時には脚色に基づいて遺跡があとからつくられる、といったことも起こってくる。

そのような状況のもとでは、科学的な検証作業が必要となる。寝太郎伝説については、1930年代の半ば頃、細迫兼光(1896-1972年、当時弁護士、のちに小野田市長や衆議院議員を歴任)を中心とする厚狭町郷土研究会による調査、検討作業が試みられている。しかし結局、明確な結論を得ることなく研究は終了してしまった。

第二次大戦後になると、そのような学問的な作業よりは伝説の脚色化がさらにすすめられていくことになる。寝太郎伝説の場合、今日一般に流布している内容は、『朝日新聞』「民話めぐり」(1953年2月2日付)に掲載された山口県広報課長・岡不可止の書いた寝太郎伝説がもとになっている。

そこでは、寝太郎は庄屋の息子で、3年3カ月のあいだ寝てばかりいたとされ、その間に一計を案じて水田開発を思いつき、さらに水田開発の資金は佐渡金山の人夫が使っていたわらじを新品のわらじと交換して、どろの付いたわらじを水洗いして砂金をえり分けて

得た、といった話になっている。「金坑や銀坑では、坑夫が坑口から出るときは、その着物や草履を脱がして、それらについている金粒、銀粉をはたいたことは鉱山の物語りによく出ており、・・・」（若尾五雄，1994：35）という指摘を考えると、佐渡金山の話は現実にはあり得ない空想としかいいようがないのだが。

第4節 寝太郎私文書の存在

最後に、寝太郎伝説を語る私的な文書があることに注目しておきたい。

一つは、寝太郎が開発したとされる千町ヶ原の東北に位置する鴨庄に在住する縄田家に伝わる文書で、弘治3年（1557年）3月に書かれたとされている。その内容は、次のようなものである。

「清和源氏37代後裔縄田四郎兵衛清恒謹書

抑々鴨庄之地は最も由緒ある地にして、源は是れ信濃国縄田之庄に住する清和源氏平賀義信末裔平賀城主平賀成頼入道源心なる者、同国葛城主村上左右衛門之尉義清に属して天文5年〔1536年〕11月武田左京大夫晴信の為に攻められて遂に戦死す、その子清恒天文8年〔1539年〕周防国山口鴻之峯第26代の城主大内左京大夫義隆の許にたより三千石を領せらる。

後年義隆の妹を娶りて妻となす、同棲する内天文20年辛亥年〔1551年〕陶晴隆の反逆に遭ひ、主従五人落武者となり長門国塚之原冷泉判官隆豊の許にたより、隆豊はこれを助けて深川の大寧寺に至り遂に切腹す、残り主従者難をさけて鴨之庄野原太節萱に落延びて百姓となり、変名を縄田四郎兵衛清恒、同弥一左衛門清隆等一族全くかくれ人となり、昼は寝て夜に至れば出て諸計画をすすめ、ついに大萱原を開拓して、千町ヶ原と命名す、時に弘治元年之乙卯年成就して家号を関東と□□

弘治参丁巳年三月]

（引用は、江澤，1984：953、による。なお、文中の漢数字は算用数字に改めた。また、〔 〕内は引用者の付加である）。

もう一つは、千町ヶ原の西南端の石丸に在住する藤本家に伝わる文書で、永禄元年（1558年）以降に書かれたとみられるものである。その内容は、大略、次のようになっている。

「悪七兵衛景清の娘小野花の腹に伊志丸という者があり、元暦元年〔1184年〕平家滅亡の時逃れてこの地にしのびかくれたが、その時大判三枚、小判五百三拾両を持って来た。伊志丸には長男太良丸以下の子があり、百姓をしていた。

・・・〔中略〕・・・

時に59代宇多天皇の御世〔889－897年〕に、鴨之庄に太良という人があった。その父は異人であったので、妻が『あなたは何処の国の人ですか』と訊ねたところ『我は保食という者である。此の広野に水が無いので、田地になす為に七瀬川の水を取り田を開くことを企てているのである。我が姿を見よ』と言うたかと思うと、忽ち白狐の姿になった。その子が即ち太良である。

泰平元年〔私年号、1172年〕より昼夜となく寝ていたので、厚狭の寝太良と言い伝えら

れていた。そして魚築瀬より溝手をつけて大井手を築き、千町ヶ原へ水を引いた。その水口から五尺結の稲を壺把あて取って安楽に暮らしたので、荒神とも祭り稲荷大明神とも祭ったのである。

62代村上天皇の御世 [947-967年] に、211歳で死んだ]

(引用は、江澤, 1984:954、による。[] 内は引用者による付加である)。

はっきりいって、どちらの文書も作成年代に関しては怪しいものがある。『風土注進案』の記述に基づいて、のちに創作されたのではないか、という疑いは消えない。特に、縄田氏の文書に関していうと、縄田氏の系譜を記した文書のなかに当時流布していた寝太郎伝説を書き加えたのではないか、といった疑いをもつほど、寝太郎への言及部分は唐突な感じがするのである。また、後者の藤本氏文書に関しては、「年代の考証は支離滅裂の上に白狐が出たりして、寝太郎の実証とはおよそ縁遠」いばかりか、寝太良、魚築瀬、大井手、千町ヶ原といった人名や地名などが揃い過ぎているという点で、後世の筆による可能性が高い、とする指摘(江澤, 1984:954-955)に賛同したい。

第5節 寝太郎伝説の初出文献『地下上申』

以上が、江澤(1984)に基づいてわたしなりにまとめた寝太郎伝説が成立するに至る経緯にかかわる主要な論点である。

ところが、寝太郎伝説の文献上の初出に関していうと、実のところ、『風土注進案』より100年ほど前に書かれた『地下上申』のなかの記述なのであった(江澤, 1984, は、なぜかこの点には全く触れていない)。そのなかに、次のようにある。

「一右広瀬村と申も格別由緒無御座、尤此沖千町畔と申所有之、往古荒地にて候所ニ厚狭之禰太郎と申者吟味にて田地ニ相成候由地下人申伝候」

これこそが、今日の寝太郎伝説の原型というべきものなのであった。

この報告は「寛保2年(1742年)6月19日」に「小都合の庄屋・長谷川彦右衛門」によって行なわれている。そしてここでは、「昼間は寝ていたから寝太郎という」などという話にはなっておらず、この伝説の核心は、荒地を田地に変えた人物が「厚狭之禰太郎」だということだけなのである。

しかも、この村には「格別の由緒はない」ともいう。それを踏まえていけば、寝太郎伝説にまつわる数々の遺蹟はのちの時代の創作、つまり偽造と考えてよいのではないだろうか。つまり、伝説が様々なかたちで語り伝えられ、内容的に装飾が加えられて、さらには、その装飾に基づいて遺蹟などがあとから付け加えられていったという事態が、ここからもみられるのではないかと思われるのである。

第6節 地域の開拓者・寝太郎

では、寝太郎伝説の深層には一体何があるのだろうか。それは確かに、開拓の話である。この地域の開拓は何回にもわたって営々と行なわれてきたものだろう。江戸時代にこの地域を支配していた毛利氏の開拓地は「開作」という名称が与えられることが多いが、「開

作」地名は寝太郎伝説とはかかわりが無い。ということは、寝太郎伝説はそれよりも遡ることになると考えてよい。そうだとすると、中世の大内氏支配の頃か、あるいはさらに遡って、古代にまで至るかもしれない²。

開拓という文脈でもう少し考えてみると、古代・中世の開拓には寺社がかかわっていることが多い。村をつくるということはその生産基盤である農耕地をつくるということなのだが、そのためには水路をつくらなければならないし、農耕具も用意しなければならない。そして村を統合するために神社を建立し神を祀ることになる。これらすべての中心にあったのが寺社の存在である³。もし寝太郎が地域の開拓者であるというのなら、それは寺社の存在と確実に結びついてはいたはずである。

第7節 琳聖太子伝説

このような観点からみると、まず考慮すべきは、鴨之庄という地名の由来となった鴨神社の創建事情だろう。

『鴨神社略縁起』によると、この神社は延暦7年(778年)に久津(沓)に百済の聖明王妃を祀ったのがその起源とされている。聖明王妃は朝鮮側の文献では聖王といい、日本に仏教をもたらしたとされる歴史上の人物である。その第三子とされる琳聖太子は『大内多々良氏譜牒』(成立年不明、ただしおおよそそのところ、15世紀後半の成立と考えられる)において大内氏の祖とされ、推古19年(611年)に周防国多々良浜に上陸し、摂津に上って四天王寺の聖徳太子に謁して周防国大内県を賜ったとされている。そして日本に妙見信仰をもたらしたとされてはいるものの、実在の人物かどうかについては疑問の余地がある(古川薫, 1974: 13、なお、『寛永系図』では琳聖太子は百済王・余璋の第三子とされている)。

その琳聖太子の上陸地点として、『大内多々良氏譜牒』は現在の防府市多々良を挙げているが、それ以外にも、山陽小野田市江尻、山口市陶、岩国市装束の浜などの場所が伝承されている。そのほかにも、周防、長門にはこの琳聖太子にまつわる伝承が数多くあり、興隆寺(山口市大内御堀)、専念寺(下関市南部町)、永福寺(下関市観音崎町)、常元寺(下関市松屋)、無動寺(柳井市阿月)などは琳聖太子が開創したとされているし、防府市高井の大日古墳(全長42メートルの前方後円墳)は琳聖太子の墓だともいう。

おそらくそのような一連の伝承の一つとして、琳聖太子の母親である聖明王妃の上陸場所は厚狭の梶浦だとされているのである(金達寿, 1991: 240)。王妃は厚狭に定住し、この地で亡くなったという。そして、その没後一世紀半のちに、その霊をこの地に祀ることになり、それが鴨神社の創建事情だというのである。ところが、この神社は大同3年(808年)に、京都の下鴨・上賀茂神社を迎えることになった。その経緯は、「白い鴨が二羽、雲間から飛来して社に入り、農民たちが射おとそうとして騒ぐうちに、姿を消してしまった。ところがその夜、王妃に供奉した家々のものが一様に悪夢を蒙り、我は京都の下・上鴨大明神なり云々のお告げがあり、ここにその分霊を勧請するに至った」(金, 1991: 262)からだという。

これらの伝承は、もちろん、そのまま受け止めるわけにはいかない。特に、大内氏の始祖伝承とのかかわりで琳聖太子が登場する場合は、中世の大内氏による作為性が強い。だがその一方で、琳聖太子にまつわる伝承が全くの偽作であるというわけでもなく、大内氏の作為以前から、この周防、長門周辺には琳聖太子につうじる何らかの伝承が存在してい

たと考えられる。大内氏はその伝承に基づいて、自らの始祖伝承を創作したとみる方が自然である。

このように考えるとき、琳聖太子にかかわる伝承はこの地域の開拓の歴史を物語っている、と受け止めることができる。王妃が本当に渡来したかどうかは別にして、それは、百済の王子（琳聖太子）を自己のアイデンティティとする百済系の渡来人たちがこの地域を開いたということだろう。ところがそののち、そこに京都・賀茂神社由来の宗教者たちが入り込んできた。「二羽の白い鴨」とは下鴨・上賀茂社ゆかりの製鉄民の到来を示している⁴。その結果、聖明王妃を祀る神社は鴨神社となり、祭神は下・上鴨大明神を主神として、聖明王、聖明王妃、北辰妙見（琳聖太子）、琳聖太子妃、十一面観音を祀ることになった。

先行する土着の神は新参の神とともに継続して祭祀されているが、これは宗教による地域支配の形態を示すものだろう。また、北辰妙見が琳聖太子とされているのは、琳聖太子が妙見（北極星）信仰をもたらした人物とされていることとかわっている。その妙見信仰は製鉄民ゆかりの信仰であり、琳聖太子や聖明王も製鉄の一族であることにも注意を払っておきたい。さらに、観音菩薩は琳聖太子の念持仏とされているが、その一方で、十一面観音などの変化観音は、製鉄民にゆかりの信仰対象でもある⁵。

中世の大内氏が琳聖太子を始祖として挙げ、多々良姓を名乗っているのも、このような事情を考慮しないと理解することはできないだろう。すなわち、彼らは岩見銀山の開発にかかわりながら成長を遂げた製鉄民の末裔だったのである⁶。

なお、鴨神社はその後、寛治4年（1090年）に、厚狭庄公田30町歩を京都・下鴨（賀茂御祖）神社に寄進している（大日本史料「賀茂社古代荘園御厨」）。

第8節 寝太郎とはだれか

以上の点を踏まえていえば、水田開発を含めたこの地域の開発は百済系渡来人の定着以来継続的に行なわれているのであって、必ずしも大内氏や毛利氏の時代に限定して考える必要はないことになる。

そのことを確認したうえで、寝太郎伝説の核心は何かといえば、伝説の原型ともいえるべき『地下上申』には「寝てばかりいる」という意味での寝太郎は存在しなかった、という点である。寝太郎は禰太郎であって、「ネ」という読みが重要なのである。この点については江澤（1984）もこだわりをみせているが、突っ込んだ考察はしていない。

では、「ネ」とは何か。わたしにいわせれば、「ネ」とは「子」であり、「子の星」につうじるものだ。「子の星」とは北極星（Polaris）、すなわち妙見にほかならない。そして「太郎」というのは「タタラオ」、すなわち「タタラを操る男」という意味である。

妙見信仰と鉾山やタタラ製鉄との関係を早くから指摘していたのは、若尾五雄である。若尾は妙見社と鉾山とのあいだの相関関係を確認したうえで、星と鉾山との関連について、「隕石落下という自然現象から、天空の星は金属であると、原始人は考え、そこに鉾山神としての星神信仰が発生したことはじゅうぶんに考えられることであり、また「星神、とくに妙見神の鉾山神としての、信仰の原因のひとつに鉾山師がいまでも『鉾脈、鉾床はかならず北方に向かって延びている』とする定説も関係があるのではないか」（若尾、1991：139）と指摘している。

このように考えるならば、寝太郎伝説は妙見信仰をつうじて、この地域に色濃く残る琳

聖太子の一族にまつわる古代百済系の伝説と結びついていく。

しかしわたしは、古代百済からの渡来人の伝承がそのままのかたちで江戸時代まで継承されてきたのかどうかについては、慎重に考えたい。というのも、古代採鉄部族・加茂氏の系譜を引く京都・賀茂神社の宗教者ゆかりの伝説のフィルターをかいくぐっている可能性もあるし、さらには同じく製鉄の担い手でもあった熊野系修験道の影響も考えられるからである⁷。

第9節 金属の痕跡

だがいずれにしても、寝太郎伝説の背景には、この厚狭の地が古代以来製鉄と深くかかわっていたという事情があることは間違いない。そもそも厚狭とは、『和名抄』において「アズサ」（安都佐ないし阿豆佐）の読みが当てられてはいるが、「サ」の音に注目すれば、それは砂鉄の採取地を意味するものであっただろう。また琳聖太子の母后の上陸地点とされる「梶浦」の「梶」も鍛冶の意味であって、製鉄の原料である浜砂鉄の採取とかかわっている。『風土注進案』によると、かつて内陸の鴨神社から梶浦の海岸まで神幸が行なわれていたというが、それは浜砂鉄の採取とその精錬地とのあいだの往復を示すものだろう⁸。

その一方、山口県教育委員会の採鉄・冶金にかかわる調査報告書によれば、「金属鉱山で、発見および採掘の時期が江戸時代かそれ以前にさかのぼるもののうち、所在不明の遺跡」として、厚狭村の「鴨庄」鉱山の名前が挙げられているし、また同報告書に収められている「近世防長銅山分布表」には厚狭郡鴨庄「沓嶽山」鉱山の名前が挙げられている（山口県教育委員会，1982：14，97）。

さらに、貞和5年（1349年）11月21日付「安尾文書」には長門国金屋の一つとして「厚狭新金屋」が挙げられていて（竹内理三編，1988：85－86）、この地域と金属生産とのかかわりの一端が示されているのである。

以上を踏まえていえば、寝太郎は妙見信仰を担う製鉄民だったということになる。それが「三年寝太郎」に変化していったのは、妙見信仰と製鉄の視点が脱落していったからにほかならない。

第10節 結語

この小論では、今日広く知られている寝太郎伝説の始原に溯り、伝説が本来意味するところを把握しようと試みた。

寝太郎伝説の原型は、もともと荒れた土地だった場所を「千町畦」と呼ばれる田地に変えた、というところにあった。しかしその話は、厚狭川から分水して水田に縦横に水を張りめぐらせるという水利、土木技術の話としてより具体的なかたちをとって展開していく。その一方で、「寝太郎」と書かれることが定着すると、農民とは異なった、寝てばかりいるような生活をする疎ましい青年の物語ともなり、さらには、厚狭の港から千石船を出して瀬戸内海から日本海を北上して佐渡ヶ島へと渡り、佐渡金山で砂金のついたわらじを入手し、それを資金に灌漑工事を成功させる、という具合に、スケールの大きな話へと発展していくことになった。ちなみに、寝太郎伝説のこのような発展過程にはおよそ200年の年月がかかっているわけで、その時代ごとの様々な局面において、人々は寝太郎のことを土地の英雄と考えて、想像力をめぐらせてきたのである。その過程は、寝太郎を伝説

上の人物として扱い、史実とは異なるものとして、地域の娯楽の対象としているかのようでもある。

とはいえ、伝説はその始原において何かを語っている。それも事実を歪められたかたちで語っている。「語り」とは実は「騙り」なのである。その騙りを解明するためには、それなりの作法が必要になる。一言でいうと、それは伝説を伝説以外の資料で検証してやることである。それは必ずしも、伝説を伝説以外の資料によって裏づけるということではない。むしろ、伝説の始原の姿を確定しつつ、そこに、より一般的にみられる構造をみつけ出すことである⁹。

寝太郎伝説の場合、寝太郎はだれかと特定の人物に当てはめようとするのは、限られた資料のもとでは困難が伴う。それははじめから無理な話である。しかし、おおよその人物像は浮かんでくる。それは、この地域に色濃く残る妙見（北極星）信仰を担う製鉄民の姿なのであった。寝太郎は寝てばかりいたのではなく、「子（ね）の星」への信仰を象徴していたのだ。すなわち、寝太郎伝説と、周防、長門地域に色濃く残る大内氏の始祖伝承としての琳聖太子伝説の背後にある妙見信仰との結びつきこそが、謎解きの鍵を握っていたのであった。この両者が結びつく深層構造とも呼ぶべき地域形成の基層を欠落させてしまうと、みえるものもみえなくなってしまう。

実際、これまでのところ、このような指摘は皆無であった。寝太郎伝説研究の多くは、「騙り」としての「語り」と後世の脚色に足をとられていたのである。

しかし本稿の結論は、この地域における妙見信仰を知る人にとっては容易に了解可能なものといってよいだろう。妙見信仰と寝太郎伝説のかかわりは、意外な盲点を形成していたというほかはないのであった。

（いのうえ・たかお 本研究科教授）

¹ 「ものくさ太郎」の話の要点は次のようなものである。「信濃国のものくさ太郎はひどいなまけ者であったが、都に上って、まめまめしく働いた。歌の才がすぐれていたので、美しい妻をめとり、高い位にのぼることができ、ついに神として現われたという。なまけ者の妻求めについて語るのは、『隣の寝太郎』の昔話とも通ずるものであるが、また本地物の要素をも備えている」（大島建彦校注・訳、1974：230n）。厚狭の寝太郎伝説のなかの、寝てばかりいる怠け者という部分は、この「ものくさ太郎」の話につづるところがあるのかもしれない。

² 実際、「厚狭郷」には条里制の地割も残されており、その開発は古代にまで及んでいる。その一方、『風土注進案』の記述に基づいて、江戸時代に厚狭川から分水して千町ヶ原に水を引いて水田をつくる工事が行なわれたのではないかと、という推理が成り立つが、この点に関しての公式上の記録は全く存在しない。しかし近世以降の耕地面積と収穫量の推移からみると、鴨庄および末益に関しては、寛永坪付帳（寛永2年＝1625年）から貞享検地（1686年）のあいだに、耕地面積が3割弱、収穫量が3割強増大していることから、開作事業が行なわれたのではないかと、みることができ（江澤，1984：955-956）。とはいえ、『地下上申』の記述に即していうと、寝太郎伝説を江戸時代の水田開発にかかわらせて捉えなければならない必然性はないわけで、もっと古い時代の開発のことを語り伝えている可能性があることに注意しておく必要がある。

³ この点ともかかわって、鉱山と社寺の関係を念頭においた若尾五雄の「今までの歴史家は、社寺を宗教的な面ばかりから見ようとし、それらの社寺のはじめが産業と関係していたことには目を向けることを好まず、社寺の精神面の強調のみに終わっていた」という指摘に注目したい（若尾，1994：33）。

⁴ 「色が白い鳥」という意味での白鳥伝説と製鉄とのかかわりについては、谷川健一（1986）、を参照。

⁵ この両者の結びつきは、鉄穴（かんな）と観音の音の類似性によるともいわれる。例えば、埼玉県熊谷市近郊の観音山には瀧泉寺という観音寺院が祀られているが、この山は別名を砂山といい、かつて山頂から土砂を流してふもとの狭山池で選鉱する「鉄穴流し」が行なわれていた。ここでは、「鉄穴」が最初にあっ

て、その作業が終了したのちに、観音が祀られるようになったのであって、その逆ではない。観音山についての詳細は、清水寿（1994：67-84）、を参照。

⁶ 江戸時代に成立した『石見国銀山旧記』によれば、石見銀山は、延慶2年（1309年）に、周防国主・大内弘幸が北辰星（妙見）の託宣により「仙の山」（標高537メートル）に銀が出ることを知ったことに始まるという。

⁷ 加茂氏の系譜のなかには多々良を名乗る者もあって、多々良姓は本来のところでは、大内氏とはかかわらなかったとみるべきである。また、厚狭の地で熊野信仰の拠点となったのは、松岳山の中腹に位置する正法寺である。源平壇ノ浦合戦の折りの火災によって焼失したためこの寺の詳しい来歴は不明だが、熊野権現の勧請に由来するという。本尊は十一面観音で、山内や山中に62坊を有し、周防長門の宗たる寺院の一つとされたこともあるという。厚狭における熊野信仰については、下中邦彦編（1980：385）、を参照。

⁸ 砂鉄の採取地と精錬場所は必ずしも近接しているわけではない。その理由は、精錬のためには大量の木炭が必要になるからである。精錬地は燃料が得やすく、通風のよい場所が選ばれる傾向がある。

⁹ この点に関連して、井口一幸が次のように述べているのは示唆的である。「記録のない歴史を探る手段がないわけではない。郷土史という狭い視野からではなく、全国的に目をむけて神社、地名、伝承の中から解決の糸口を探ることができる。それに考古学という“物証”がつけば、一番確かではあるが、それがなくても、文学的発想で仮説を立て、文献史を心証的に進めば、道は開けると思う」（井口一幸、1978：14）。ここでのポイントは「郷土史という狭い視野からではなく、全国的に目をむける、ということである。その際、のちの時代に付着した夾雑物をそぎ落として、ある程度まで伝説の原型を把握しておけば、全国的な視点、つまりより一般的な視点に、より一層容易に立つことができるのではないか、と思われるのである。

〈文献〉

- 江澤能求，1984，「寝太郎物語」山陽町史編集委員会『山陽町史』：951-962頁。
 古川薫，1974，『大内氏の興亡－西海の守護大名』創元社。
 井口一幸，1978，『吾妻の国物語－上州・秩父・児玉の鉄と古代史－』国書刊行会。
 金達寿，1991，『日本の中の朝鮮文化』8（因幡・出雲・隠岐・長門ほか），講談社文庫。
 大島建彦校注・訳，1974，『御伽草子集』（日本古典文学全集36），小学館。
 清水寿，1994，『鑄師・鍛冶師の統領と思われる畠山重忠について』。
 下中邦彦編，1980，『山口県の地名』（日本歴史地名大系36），平凡社。
 竹内理三編，1988，『山口県』（角川日本地名大辞典35），角川書店。
 谷川健一，1986，『白鳥伝説』集英社。
 若尾五雄，1991，「鉱山と信仰」佐野賢治編『虚空蔵菩薩信仰』雄山閣出版：129-139頁。
 若尾五雄，1994，『黄金と百足－鉱山民俗学への道』人文書院。
 山口県教育委員会，1982，『生産遺跡分布調査報告書（採鉱・冶金）』。

〈付記〉

本稿は「地域情報の歪みとナショナリズム－厚狭の寝太郎伝説をめぐる－」（『地球情報社会と社会運動』所収、近刊）と題する別稿と一対をなしている。別稿では、伝説をはじめとする地域情報がなぜ歪むのか、という点に関する分析が中心となっているのに対して、本稿は「寝太郎伝説の始原」の解明を資料に基づいて行なうことが主眼となっている。

なお、『地下上申』記載の寝太郎伝説の原型に関しては、山口県立図書館参考課に調査協力をしていただいた。深く感謝したい。